

国際交流基金事業外国人学識者招請アポイントプログラム実施報告書

法学部教授 櫻井直文

招請者氏名：ピート・ステインバックース Dr. Piet M. L. Steenbakkers

所属機関：ユトレヒト大学（オランダ）

招請期間：2018年5月10日～5月19日

ステインバックース氏は十七世紀オランダの哲学者B・スピノザの研究における第一人者であり、とくに文献学的手法によるその堅実な研究は、オランダ国内ばかりでなく国際的にも高く評価されている。スピノザの主著『エチカ』の草稿の写しが、2010年にバチカンの収蔵庫から三世紀半のあいだをおいて発見されたが、それは、この主著が友人たちによって編集され『遺稿集』（1677年）という形で出版されるまえの原形をとどめるものであったため世界的に大きな話題となった。ステインバックース氏は、このバチカン写本の鑑定と校訂においても重要な役割をはたされ、現在は、このバチカン写本をあらたな原資料とする『エチカ』のラテン語テキスト新版の作成にとりくまれている。同氏は、5月10日から19日まで明治大学に滞在され、その間に全3回の講演（※）を行ったが、そのうちの2回は、下記に示すように明治大学駿河台キャンパスで開催された。以下にその2回の講演の要旨を示す。これらの講演には、明治大学内ばかりでなく学外からも、当該領域や関係諸領域の多くの研究者および一般の関心ある参加者が集まり、講演後の質疑や談話を通じてきわめて刺激的で実り多い交流があった。これらの講演は、講演の英文テキストと、あらかじめ作成しておいたその翻訳とを聴衆に配布のうえ行われた。

（※あとの1回の講演は、京都の立命館大学において行われた。全講演の翻訳が、スピノザ協会年報『スピノザーナ』第16号（学樹書院刊）に収録されている。）

第一回講演：

“Spinoza’s Ethics: A New Edition of the Latin Text（スピノザ『エチカ』のラテン語テキスト新版について）”

（日時：2018年5月12日（土）15:30-17:00／場所：明治大学駿河台キャンパス 1105 教室／参加者約40名）

上述のようにスピノザの『エチカ』のテキストと校訂作業は、バチカン写本の発見によってはじめて端緒についたといつてよい。ステインバックース氏は、『エチカ』の生成過程を八つの「場面」に分けて綿密にたどり、そのうえで、その校訂作業の底本とすべきものは、スピノザの死後出版され友人の编者たちの手がいっていると考えられるラテン語の『遺稿集』と『蘭訳遺稿集』（いずれも1677年）、そして、おそらく1675年のスピノザの自筆草稿の原形をもっともよくとどめていると考えられるバチカン写本の三つであることを説得的に示す。そのうえで校訂者としてこれら三つの底本のそれぞれにたいしてどのような態度でのぞむべきかを示したあと、具体的にその校訂において問題となった五つの箇所（こ

れらを氏はスピノザの名前の意味〔「棘ある場所」〕にちなみ「棘ある箇所」と名づけている)にそれぞれどのような検討をほどこし、最終的にどのような結論にいたったかを詳細に明らかにする。このような校訂作業の結果は、来年中に出版が予定されているステインバックス氏編の新校訂版となって結実する予定であり、今回の講演は、その出版の前にその内容の一端をわれわれに明かしてくれたものである。その意味でもきわめて貴重な講演であった。

第二回講演：

“Our knowledge of Spinoza’s life and works (スピノザの生涯と著作についてわれわれが知っていること)”

(日時：2018年5月13日(日)10:00-11:30/場所：明治大学駿河台キャンパス1105教室/参加者約30名)

スピノザの生涯についてわれわれに知られていることはすくない。かれは公的な地位には一度もつかなかったし、またユダヤの共同体から破門されたのちもオランダのキリスト教的共同体をはじめいかなる公的なサークルにも帰属しなかったため、かれの生涯については公的な資料がほとんど残されていないということがその一つの理由である。またもう一つの理由は、かれの教説はその同時代人の多くから無神論的なものとして認められていたため、書簡をはじめかれとのかかわりを示す資料を保存することには実際的な危険がともなったということがある。さらにそれにくわえて、無神論的な教説と、それを奉じる本人の模範的な生活との結びつきは、同時代人の多くにとってはひとつのスキャンダルであり、スピノザの敵対者たちは、そうした結びつきを否定するよううわさを流し、また、支持者たちも、そうした結びつきを過度に強調するしかたでかれの生涯について語ろうとした。そのため、スピノザについての同時代人の証言には、そのままことば通りに受け取れない多くの要素が含まれていたからである。ステインバックス氏は、以上のような理由から、今日にいたるまで異説の多いかれの生涯とかれの著作の成立事情について、かれの誕生から死にいたるまで、信頼できる事実とそうでない事実とを腑分けしながら、きわめて適格に要約し、それは今日われわれが入手できる最良のスピノザの伝記となっている。今後日本でスピノザの生涯とその著作の成立事情について語られる場合、この講演はそのもっとも信頼にたるとなる典拠となることだろう。

※うへの二つの講演は、京都の立命館大学で行われた三つめ目の講演とあわせて、『スピノザーナ(スピノザ協会年報)第16号(学樹書院、2018年9月30日刊)にその邦訳が収録されている。